

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 48: 59-78
Issue date	1896-06-28
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4975">http://hdl.handle.net/2298/4975</a>
Right	

（第三）斷々乎として、予は國民文學を拒くるものにあらす。文學を平等的なりといひ、世界文學となれよと云ふとも決して、國民文學を拒否する議論にはあらざるなり。乞ふ。更らに、第三十九號を詳讀せよ。尙ほ、可ならずば『文學は平等的なり』の條下を詳讀せよ。ヘルデルの如きは、國民文學を拒げざると共に、熱心なる世界文學の主張者なりしことを知らば、足下は思半に過ぐる者あるべきなり。（第四）主人は予を以て國民的精神を排斥する者なりと云ふ。乞ふ。其証あらば願くば是を示せ。而して、第四十五號の主人は、『余は學人が文學上に於ける國民的精神を排斥するものなること疑はざれども、未だ單に、國民的精神を排斥する如き腐腸男子に非ざるを信せんと欲するものなり』と云ふ。町、虚傲の言を吐くことを止めよ。第四十號六十六頁『若し國民的精神あるか故に各國皆其固有の精神を去るべしと云ふものあらば、誰か其暴論に驚かざらむ』とは如何なる人か、如何なる人にか云ひけむ。

最後に尙ほ一言せむ。足下曰く『姑く茲に筆を擱きて、學人が遠慮なく論議するの餘地を遺さ置くものなり』と。多謝す。さりながら、足下を俟たずして予は充分の餘地あり、以て論議すべきの權を有せり。龍南會は足下のみの專有物にはあらざるなり。足下は我校の俊秀、識見該博、カント、ポスト、ツット、シェールプを連覽せるの士、予は今餘りに足下に對抗せるの忸怩たるに堪へざるなり。暑假將近矣。綠蔭清樹の下、共に論を上下せんか。時下正に不順、足下幸に自愛せよ。不備。

明治廿九年五月八日脱稿

（完）

## 雑 報

### ○夏期休暇

勉めたるものは遊ばざる可らず。勝ちたるもの

は酬いられざる可らず。頭を回せば一年の苦學何事の成されたるやを知らず。然れども幸にして最後の決戦なりし學年試業は、もろくも、我に降り、今や天上天下敵なきの思をなせり。而して之に酬いんが爲に六旬の休暇は與へられたり。

乃ち課書を收め師に辞し、飄然として校門を出つれば、竜山白水笑て我を送るが如きは其兒の功を賞すればならん。松巖水聲と相和して天樂を奏するが如きは遊子壯遊の首途を祝ふにか。

已にしてなつかしき故郷の青山白水を踏て閭門に來るの時、驀然宙を飛んで兄郎の歸來を報ずる幼弟はなきか。報を得て直に門戸に出で、先づ迎へらるゝ慈母は在さずや。されど我樂境は此處のみなりと思ふは未だし。君不見や、雲か雲にあらず、山か山にあらず一洙沓として再ひ望む可らず。只見る青海渺々として天碧に混するを。是當に君が航すべき所にあらずや。又見ずや、青山白嶺轟々として竝立す一峰登り盡せば一峰更に雲に入る。是れ當に君が登るべき境にあらずや。若し夫れ是等自然の美に融合するに當てや

此中有眞意。欲辨已忘言。

人皆小陶淵明たるを得ん

To her fair works did Nature link  
The human soul that through me ran;  
And much it grieved my heart to think  
What Man has made of Man.

フルツアルスの想を得る必しも難からざらん。或は元嶺に登臨して嘯昔ラヴァを流したる形跡を考へ、或は手にマイクロスコープを把りて海上に動物を探り。或は緑り蔭なす幽窓に哲理を考へ山を呑む高樓に國勢を論ず。人生の快事何物か之に過ぎん。而して吾人今之を得たり。豈又快ならずや。只願ふ諸君が此際養ひ得たる衝天の氣魄と奔逸の思想とを以て演説に雜誌に陸離の光彩を添ふるに吝なるなからんことを。

## ○柔道紅白勝負大會

遼東の野、碧血尙は腥く、南海の天、波瀾未だ穩ならず。陰雲は慘憺として北方の空を掩ひ、殺氣は殷々として鷄林の野に滿つ、正に是れ千百の地雷大地の下に埋没せるもの、一線の導火之に通せば、百雷轟き硝烟迸り、日月光を晦し天地容を失ひ、怪鷲獐獅飛翺跳躍して東洋の天地將に一大活劇を演せんとす。是の時に當り、咏花弄月優々として安を偷むもの、果して大和民族と謂ふを得べき乎。

我蜻蛉州古來武を以て國を建つ。上には萬世一

系の帝室を戴き、下には四千余萬の同胞あり。三韓を征服せしは、吾人の祖先なり。元虜を鏖殺したるも、吾人の祖先なり。思ふて斯に至れば、吾人は祖先の赫々たる勳功を仰ぐと共に、大に又其昭々たる遺風を顯彰せずんばあるべからず。然り而して何事ぞ、今や則ち斯くの如し。終天の恨事にあらずや。苟も生を此土に承くる者臥薪嘗膽以て此の終天の恨を晴さずて可ならんや、遺風とは何ぞ、武道是なり、凡そ武道の目的は、實に至大至剛の精神を養ひ、心膽を練るを第一とす。剛毅、勇敢、濶大、和平、耐忍、果斷、慎密、威重、勉勵、躬行の諸德皆是れ武人特色の精神とす。泰山前に崩るゝも、江海後に決するも、悠然として動ず、機を見て失はず、時に遇ふて疑はず。是れ英雄神速の機なり。能く此の機を得て、百事成すべく、千障排すべし。風能く喬木を折ると雖も、柳枝を損する能はず。水能く大木を浮ぶと雖も、細石を浮ふる能はず。是れ柔克く剛を制する所にして、天下の至柔は至剛と馳騁すと云へるも、味ひ來れば、趣味深奥、萬物の精理も我柔道の精神に外ならざるを覺ゆ。此の精神あ

りて、始めて終天の恨雪ぎ得べし。風雨に變化し天地を上下する蛟龍も雲雨を得ざれば尙猶癩の笑たるを免れず。人生學ばざれば知らず習はずんば至らず。我柔道部豈無意にして設けられんや。然るを何等暗々の徒ぞ、敢て喋々我神聖なる武道を輕視し、以て自己の弱を掩はんとす。吾人元より此等薄志弱行の徒に、耳を傾くる者にあざれども、其後來日本の維持者として世界の上に立たんとするを思はば誠に寒心に堪えざる者あり。然れども亦彼の徒らに柔術家を氣取り、高慢、粗暴、似而非豪傑を學ぶ者又斷じて排斥する所なり。もし夫れ講武の如何に興味津津たるか、又其の如何に吾人をして心身爽快胸肚晒然たらせむるかは、到底門外漢の知る所にあらざるなり、もし此の裏の眞趣を味はんと欲せば請ふ來りて瑞邦館に學べ。

瑞邦館は嘉納校長の時設けられたる者にして、既に四年前の事なりとす。當時未だ諸事其緒に就かず、野口喜入の諸先輩頗る勉めらる、久保池田兩君此時よりして、大に我校柔道の爲めに盡され、殊に其委員とならるゝに及びては、愈勉め

獎勵誘導至らざるなく、九夏三冬も以て其志を碎くに足らず、其今日の隆盛に至れる、兩君の力尤も與りて効ありとす、而して今や兩君數旬の後遠く中原に鹿を争はんとす、我柔道部員烏ぞ滿腔の誠心を以て、之を送らざらんや。斯に廿月廿二日兩君送別會を兼ね、柔道紅白勝負を施行せり、予之に於て歡喜措く能はず、聊か兩君へ對し感謝の意を表せん爲め、且つは委員の需めにより、斯に當日景況一斑を記す事としぬ。同日午後二時半開會の撃柝は鳴りぬ部員參觀者、集る者二百に近し、賀來部長は勿論、佐久間教授等も參觀しぬ、やがて三時ともなれば、委員は取組者の姓名を呼出しぬ。野口君は先づ立ちて開會の主意を述べられ、池田君之に答へらる。吾人は委員が今兩君を送るに、美酒佳肴を用ひず、殊に紅白勝負を行ひたるに於ては、兩君も必ず充分の満足を以て受けられたらん事を信ず、何となれば此等數十の健兒皆兩君の誘導啓發に由れる者なればなり。嗚呼龍山高し、白川長し、兩君が我柔道部に盡されたる効績永く其れ滅する期なからん。

紅白兩組今や呼出されぬ、數十の健兒稽古衣を着し場の兩端に陣したり。紅は有働野口兩君を大將として之に従ふ勇士には五十嵐木本二君を初めとし六尺に餘る中嶋君剛力無双の鏡山君列び連る益荒雄が腕をさすり、氣をこらし、吾こそ敵を討取りて功名立て芳ばしき名を、末代迄も輝かさん、と勇み立つこそ殊勝なれ、さても白組にては、御大將富田君、勇氣凜々しく、之に従ふ勇士には、名も恐ろしき熊谷君、登る旭の國廣君、田崎松原二人の剛力、敵に飛鳥の衝あらば、我に潜龍の妙技あり、敵に當麻の力あらば、吾に宿禰の力あり、力の及ばん限り、氣の繼かん限り、敵に後れは取りはせじ、思ひの儘に暴れ廻はり、快く屍を戰場に露し、天晴勇士の鑑ぞと、後の世迄も歌はれん、互に勵み勵ましつ時や遲しと待居れり、既に紅白互の禮も終れば滿場水を打ちたる如く靜まりて、又自ら尋常ならず見えにけり。

取組 業名 姓名 (右紅 左白)

第一回 荒川君と稻益

君、是れぞと思ふ事は

休落

荒川 常吉  
稻益 孝太郎

無けれど、荒川君前回の勝負に比して、非常

2m45 1m35 .25 2m50 4m15 3m05 2m10 1m40 2m15 .26 .25 1m .25 1m15.

横捨身 間嶋道知 小川一麻呂  
眞傷 石川又二郎 間嶋道知  
喉絞 石川又二郎 榮  
体落 蓼原三雄 榮  
喉絞 於保庫一 榮  
体落 木村晋二 郎  
抑込 古川高次 庫一  
抑込 古川高次 庫一  
腰投 櫻井浪之助 鐵治  
抑込 德谷豐之助 鐵治  
抑込 白井鐵治  
大外刈 米原弘 鐵治  
膝車 川村泰二 郎  
体落 山口謹五 郎  
抑込 高松常吉 積

の進歩をなせる如きは、いどめでたき事にこそ。左れど平生の稽古に、力入り過ぐる如く、思はるゝは僻目か、君之を思へ。第三回体と云ひ、業と云ひ、山口君の勝ちたるは當然とや云はむ。第五回米原君、苦もなく膝車にて勝ちたるは感服。第七回臼井君力もあり、且つ巧者に見えけり、櫻井君小兵といへど、元と腕に覺えある者、決して侮る可からず、されど体と力、遂に敵せずして敗る、残念。第八回徳谷君逸やりに逸やる、臼井君を己れ思ひ知れ、と計りに抑込み

3m 3m4 .20 2m30 1m 1m20 .50 5m .5 .30 .15 1m50 1m30 2m .55

体落 田嶋蘇一  
抑込 木本正一  
脊負投 後藤一雄  
膝車 友枝高彦  
足掃 友枝高彦  
裏投 松島常章  
喉絞 中島直則  
足掃 北嶋弘吉  
足掃 北嶋弘吉  
巴投 小川瑳五郎  
抑込 山本直枝  
抑込 上野小十郎  
足掃 大野勇吉  
抑込 小川一麻呂

たるは見事。臼井君三人投も圖に外れ、遺憾に存する。第十回於保君ハ力は勿論、技も古川君より優りて覺ゆ、之れ全く君の熱心の致す所なり。吾れ道場に君を見ざる日は殆んど稀なり。君愈勉めて力を省き、工夫を積み玉へ、第十五回石川君既に宇野君に勝ちて、間嶋君に向ふ、間嶋君体軀小なれども、肥満、力強ければ、時々無理な手を出す如し。其右横捨身にて石川君を投げんとするや、手の置所悪しかりし爲め、遂に石川君をして、左手の關節を傷けしむるに

3m30	1m30	.30	1m	1m10	9m23
大釣腰	腰投	脊貫投	腰投	腰投	腰投
有働 直夫	富田 直	野口三九郎 直	五十嵐 直	鏡山 諭吉	國廣 剛毅

至れり、君之を謹め、石川君幸に静養せよ。第十七回小河君は体則ち小なりと云へども、業には頗る得たる所あり、縦横奮撃、既に間崎君を投げ、大野君に向ふ。是れ其素養の致す所か、もし体と力とを

君に假さば、其結果驚く可き者あらむ、左れと敵は強力の大野君、遂に如何ともするなく、敗る殘念、殘念。第十八回上野君力はよしや敵に劣りなれども、吾には年來練れる業あれば、何ぞて敵に勝を致すべき、遂に足掃にて勝られたるは、毎度ながら感服仕る。第廿一回取組むや小川君はや巴投にて見事一本取らわぬ。北嶋君の御手際感服の外なし。夫に付きても小川君近來頗と道場にて玉容に接せず登る山路もはや途中にて休息し侍るや。第二十二回遠き者は音にも聞け、近き者は目にも見よ、我こそは紅軍にて其人ありと知られたる中嶋某、丈は六尺を越え、力三人を兼

ぬ。過ぎにし十月の戦に、敵の大將五人迄討取りて、天晴勇士の芳名を雲井の上迄轟かせり。已れ白組の弱輩ども、我名を聞きたりて、恐るゝな、鬼にはあらじ食ひはせじ。我を我と思はん者大將も兵卒もかゝれ、と名乗らん計りに揺り出でたるは、其名も著き中嶋君、之に反して白方にては、やさしき敵の振舞かな。彼れとてもよも力に限りなき事はあらじ。入れかはり、立ちかはり、最後の勝利を得ん者と、先づ立向へるは北嶋君、心は矢竹に逸れども、敵は目上る計りの剛の者、体の小なると、力の少なきとには悲えくも、恰も球の猫に弄さるゝ如く、見ん事足掃にて吊上げられぬ。左れと是れが爲めに君平生勉強の効いかで没すべき、乞ふ之を勉めよ。第廿五回白方の剛力松原君は、味方既に二人迄討れぬる事の口惜さよ、いで敵打ちくれんと向ひけるぞゆゝしき、中嶋君の足掃疾風の如く來る様恐ろし、松原君亦受止め、受流し戦ひつ。さるに中嶋君敵の裏返しに激せられてより、心急ぎ込みたる如く見え、思はぬ不覺を取りたるは、惜みても惜むべし、靜定の工夫實に武道目的の一なり。鑑

むべき事にぞある。第廿六回澁谷君体も力も或は一步を松原君に譲らんか、されど君の開定和平なる態度は、最も貴むべき事なり、その松原君に勝てる宜なりと云ふべし。第廿九回由來脊負投に其人ありと知られたる、田崎君取組み二十秒を経ざるに、見ん事後藤君を數間の外に投げ飛ばしぬ、此の妙技を觀、誰れか拍手喝采せざる者あらんや。もし強て難せば、自ら肩を突く傾きある如し、左れどかくして初めて妙を得る者か、如何にや、知らず。第卅一回田崎君又剛力を以て知る敵も名著るき鏡山君、力あく迄強く、体座れる事又第一にやあらん、是をか自護体と申すべき、業も他流に練りし程、講道館柔道より見れば、如何と思ふ節もあれど、中々遠し玉へる如し、二者相對す、誰れか先づ胸中虎躍りて風起り、龍怒りて雲生するの壯觀を畫かざらんや。左れど惜むべし、田崎君既に敵二人と掛合ひ、体も疲れ、力も失せければ、今は思存分敵ひ得ず、夫に敵は新手の大將なれば、兎角に受太刀となりがちにて、得意の脊負投も其効なく、遂に体落にて敗らる。第卅二回白方にては旭將軍とも呼ば

れし國廣君、体技兼備の大將なり、殊に君の足掃は敵味方誰知らぬ者としてなかりけり。之に引きかへ敵方は角力構への如くして其構への固きこと城郭の如く、其腰の据われる事は盤石の如し、輕身浮體の妙元より鏡山君に望む可からず、國廣君の妙技も是を施すに由なきぞ、是非もなき、紅は付かんとし、白は付かせじとす、左に搏ち、右を攻め、秘術を盡して戰へど、何れ劣らぬ互角の勢、何時果つべしとも思はれざりけり、遂には鏡山君見事名譽の月桂冠をかけられたり、天晴天晴、第卅三回壽永の昔忍るゝ其名もゆかし熊谷君、天晴黒帶中の一勇將、一之谷の合戰ならねば敦盛卿には在まざねど、鏡山君既に黒帶二人までかけ合、痛く苦戰し、疲れたる上に、敵は名に負ふ熊谷君、尤より相手とも思はれず、左れど鏡山君屈せず、撓まず、愈奮ひ益勵み、此處を先途と戰ひけり、流石は熊谷君腰投、内股、拂腰など續けさまにかけられければ、今は鏡山君も腰高く吊上げられたる事度々に及び、最も危く見えにけり、熊谷君遂に拂腰にて勝ちたるは見事なりし、第卅五回五十嵐君既に熊谷君を倒し意



氣頗昂る、之に向ふ白方は日の出の譽れある富田君、敵の急ぐにもかゝわらず、悠々自若、和平

遂に有働君大釣腰にて勝ちぬ。以上三十有七回にて結句紅組の勝利に歸したり。

慎密の妙至り、『敵そこは獅子奮進に怒るゝも吾身やわらに心ろ鐵壁』とはかくやあらんと思はれけり、實に勇ましき武者振なり、何れ劣らぬ武者と武者、鳥を塾龍奮飛、餓虎憤躍、天地轟き、

さて此の日五級甲組へ昇級されたる五君には殊に『叙』と記せる黒帶を部長より授けられぬ、五君幸に益々其道に致せ。終りて一同に茶菓を供し和氣飄然たる内に散會したりしは午後四時を過ぐる半なりし妄評死罪。(天地出一夫悠々生投)

山嶽震ふ、活劇至らざるを得んや、左るに何事ぞ、卅秒を経ざるに五十嵐君見事脊負投にて敗らる、左れど是れも富田君の事と云へば怪し

尙平常の勉強と勝負の成績とに由り昇級せられたる者左の如し

とも覺ゆず、敬服敬服。第卅七回体勢を以て優る富田君、敏捷を以て秀づる有働君、何れ甲乙なかりけり、富田君五十嵐野口の二君を倒し初めの

#### 四級甲組へ

五十嵐 力

#### 五級甲組へ

三隅 葉藏 松原 常興 後藤 一雄  
小林 庄三郎 中嶋 廉夫

#### 五級乙組へ

江口 俊博 小原 之正 河野 司馬 三  
深浦 直則 北島 弘吉 鏡山 諭吉

#### 六級甲組へ

池田 麗太郎 小河 一麻呂 大野 數衛  
山本 直枝 福島 清 久世 庸夫  
住田 正雄 八木 辰馬 石川 又二郎

#### 六級乙組へ

の一聲を聞くに至れるぞ是非もなさ。有働君は既に一元生も評せし如く、心手自然の妙を得玉ひ、『流しける風に柳の姿』てふ『應し返し』の眞味を覺られ、岩根に寄する波のごとく、推して返し、返しては推し、あはや當り碎けて、空しく泡沫に歸せんと思はるゝ計りなり、實にも『氣や至る技や鋭どく身や迫る習ひし性ぞ唯勝ちにける』。左れど富田君の妙技屢々『まいらん』として

石川清人	唐人原景俊	泰秀	作
高橋元雄	大野勇吉	藤原三雄	
宇野榮	岡崎道知	木村晋二郎	
米原弘	川村泰二郎	和田九一	
黒瀬義一	守月晃	八波則吉	
赤間富二郎			

## ○第十一旅團の凱旋

六月七日、第十一旅團司令部熊本に凱旋す。我校の教職員學生一同、之を城外の濠側に歡迎せり。回顧すれば、一昨年朝鮮治を失え、清國盟に背き、我皇赫とえて震怒し、膺懲の大義を擧げさせ給ふや、第十一旅團は、海を渡りて山東の一角に上陸し、奮戰健闘、一呼吸を以て威海の險要を抜ぎ、將に長驅して北京に逼らんとす、會々敵國非を悔ひ、罪を我に謝す。天子特に東洋の平和をおぼして、其請を容させ給ふや、外征の諸軍皆振旅して還る。この時第十一旅團は、留て威海衛の守備を領し、榴風沐雨、備さに絶域の艱苦を嘗め、朝に大陸の妖雲を望み、夕に南海の波瀾を夢み、泰然として奉公の誠を致し、月を閲すること殆んど二十。今や楊柳暑を扇き、杜鵑山に歸るの候

を以て、茲に凱旋し來れり、忠勇の士誰か歡迎せざらんや。此日午後四時、一同校内の練兵場に整列し、隊伍を整へ出て、之を迎ふ。伊瀬知少將以下司令部の諸官馬上徐に轡を執り、諸兵之に續き、肅々として城内に入りしは七時過なりき。その光景は尙ほ諸子の目睫に在らん、特に記するの要を見ず。

## ○擊劒紅白勝負

人皆曰、文武二道は猶ほ車の兩輪の如く、鳥の雙翼の如しと。然り然り誠に然り。若しそれ文勝て武振はざらん乎、忽ち奈良平安の弱弊に陥り、優柔無爲の徒朝野に徧く、一旦緩急あるの日、亦如何ともすべからざらん。之に反して武餘り有て文足らざらん乎、戰國滄瀉の風は立るに萌し、暴虎憑河の輩は天下に蔓り、三綱道なく、勅詔亦舉らざるに至らん。寛柔にして人に教ぬ、無道に報ひざるは一方の強たり。金革を枉にして、死而不厭は他方の強たり。然れ共未だ共に中庸に適はず。苟くも其中庸を得て錦心繡腸、掣虎御龍の大強者大俊傑だらんと欲するものは、須らく彼

文を修め、斯武を勵まざるべからず。於是乎鬪つて我校頃來、運動柔道弓術擊劍端艇諸部の情況如何を顧みるに、壯氣勃焉、日を追ふて盛んに、捲土重來月と共に奮ふが如し。快絶愉快、豈に三躍以て國家の爲に祝せざるを得んや。運動弓術の兩部は既に嚮きに特技を演じ、柔道部亦別項の如くに大會を催ふせり。擊劍部寧んぞ獨り、袖手午後に安んせんや。乃ち五月廿三日、柔道部大會の翌日を卜して、大に紅白の輸贏を雨天体操場裡に爭へり。午下一點鐘、開會の擊柝鏗爾として南北習學寮の長廊を度るや、乍ち觀者山の如く、職員肅々席に就く。職員は北に觀者は南に、紅は東面し白は西面す。腕を扼して敵の氣合を窺ふもの、竹刀を横たゐて微笑一番平然たるもの、既に面を被りて天晴凱歌を揚げんとあせるもの、未だ鉢卷をのみして窃に味方の運を祈るもの、或は破れ綻りたる袴に丈夫の本領を顯はし、或は垢染みたる稽古衣に一層の勇氣を添ふ。其体たらく、げにや北邊の曠野に饑鬼を屠り、西境の庖厨に豚兒を解くに何かあらんと思はしめたり。いざ是れより、盲目の垣のどき、無鉄砲の

妄評をぞ試みじ。

紅

白

胴

上村 武尙

面、面

中村 精一

劈頭第一の組合を、紅

胸、小手

吉田 美利

面、胴

中村 精一

の上村君と

面、胴

吉田 美利

面、面

戸次 正

白の中村君

面、胴

小林 吉人

小手

戸次 正

とす、上村

面、胴

小林 吉人

小手

中村 甚作

君は平素是

面、胴

小林 吉人

胴

大西 正太郎

れ日も足ら

組打、組打

竹添 一熊

小手、

五藤 速水

ざる勉強な

組打、組打

竹添 一熊

小手、

五藤 速水

れども、未

小手、小手

笠 英記

胴、小手

大久保有明

だ新參たる

小手、面

田園 増猪

胴、小手

淺見 一

を免れず、

生駒 重彦

小手、面

淺見 一

中村君は副

生駒 重彦

小手、面

淺見 一

科の外、滅

石井 發次

小手、小手

松浦 瀾根

多に道場に

川原田友彦

小手

松浦 瀾根

出でざるが

川原田友彦

小手

關嘉 八郎

御流義なれ

面、面

川原田友彦

小手

竹崎 音吉

ど、稍舊株

面、

野口 常治

竹崎 音吉

國武 得臣

丈けにこれ

小手、胴

野口 常治

面

國武 得臣

はと云ふ落

胴、面

野口 常治

小手

川崎 齊一郎

度もなかり

小手、面

野口 常治

野口 常治

野口 常治

度もなかり

野口 常治

野口 常治

野口 常治

野口 常治

度もなかり

野口 常治

野口 常治

野口 常治

野口 常治

度もなかり

野口 常治

野口 常治

野口 常治

野口 常治

度もなかり

野口 常治

野口 常治

野口 常治

野口 常治

度もなかり

野口 常治

野口 常治

野口 常治

野口 常治

度もなかり

野口 常治

野口 常治

野口 常治

野口 常治

度もなかり

野口 常治

野口 常治

野口 常治

野口 常治

度もなかり

野口 常治

野口 常治

野口 常治

野口 常治

度もなかり

野口 常治

野口 常治

野口 常治

野口 常治

度もなかり

胴、面 野口 常治 胴 植田 精作 き、上村君

野口 常治 面、小手 石崎 芳吉 常に攻勢を

胴 勝木 奇熊 胴、面 石崎 芳吉 取り乍ら、

胴 佐伯 米松 面、小手 石崎 芳吉 面二本まで

胴、小手 池田麗太郎 石崎 芳吉 いかれたる

面、小手 池田麗太郎 岩佐 尙一 は君が余り

面、胴 池田麗太郎 面 大倉 憲英 俯向けばな

小手 池田麗太郎 面、小手 岩井啓太郎 り、行末心

飯田御世吉 突、突 岩井啓太郎 せられよ。

齋藤 禮三 小手、小手 岩井啓太郎

次に蓼原君は中村君に向へり難度となく互なりしが蓼原君は勝負には正直すぎると見えて續けば早や身は捨てゝ敵視しつ撃てばうつべし突けばつくべし、蓼原君よ、ちと先制の術を講じては如何。第三回紅の吉田美君、鍛ひ上げたる弓手を剣道にまで利用して、二人斃しの中村君を苦もなく打伏せたるは、先づ可なりの見物なりと。第四回白の戸次君、いでや一本進らせんと立上るや否や果して面を進らせたり、これより双方氣激し心逸り、亂打疾撃、相近づき相避け、暫時鎧を削りしが、戸次君の運や強かりけん、亦もね

胴を取りて勝。第五回小林君と戸次君、勝負漸く佳境に入る、互に目禮して立向ふや、小林君は石火閃電眞額も兩斷せよと計りに打て懸る、戸次君此勢に遊易し、自ら受身となりしを小林君得たりと詰入り、轉瞬の間に面と胴とを仕留めたり、是に於て拍手初めて四方に起る。第六回中村甚君、味方の仇思ひ知れど、三百六十の骨部八万四千の毛竅に、元氣を込めて戦へども、小林君は勢以前に倍蓰し、大刀風鋭く切まくる、中村君虚を窺ひ、小手一本を占むると雖も、面と胴とに敗られて、陣所に引きしど是非もなき。第八回正直一邊の大西君、偕は同級の好もあれど、一度敵手と分れん乎、遠慮會釋ハ何のその、我こそ勝誇りたる小林を只一刀に打据ゑんと、息巻きく丁々撥止と互り合ふ、胴一つに面一つ互に受けつ受けられつ、今は勝負と危ぶむ處を、小林君の打こむ鋒尖過たず、大西君の胴を眞二つになしてけり、觀者臆はず聲を出して咄と譽めたる感嘆に、一霎時は鳴りも已まざりき、あはれ世の中は三日見ぬ間に櫻かな、小林君よ君は早や吳下の阿蒙に非ざるなり、今日の働き天晴初陣の御手

柄は、いかにも感服仕れり、されど君未だ偏癖なさに非ず、これをしも愈研精陶冶せば遂には所謂九天の上九地の下に出入するに庶幾あらん歟。第八回小林君と五藤君、小林君は既に數度の合戦に疲れたりけるにや、稍不釣合なりしが如し、五藤君頗る待中懸の術を覺知したるめり、歌に「懸けて釣り挑みてや待て云々」ともありて、敵にせかて小手と面を見事にやり付けたる手練の剽姚上出來々々。第九回然れども余り落付過ぎるもいかい、膂力絶倫、技よりも寧ろ氣を以て優る竹添君に對しては、殊の外脆かりき、先づ突かんとする五藤君を、竹添君は一拂ひに拂ひ退けて、むんずと組みどろと倒れ、押へつ返しつ、上になり下になり、二分許は争ひしが、さすがは力、遂に竹添君は手早く面を剝ぎてけり、次に五藤君得意の小手一本進らせけるを、竹添君は無念に思ひ、颯々擊恰も阿修羅王の暴れたるが如く、其足踏の音は、天地に轟き人耳を聾せり、一往一來の間又もや隙を見出しけん、竹刀がらりと投棄て、大手を擴げて組付きしが、此二度目の組打にも、竹添君難なく本望遂げられて、衆人

さながら臍を捻れり。第十回此荒武者の素性を見て取れる白軍の勇士大久保君、どつこい組まれじと、鉄鎚の下るが如き竹添君の搏撃を受けつ流しつ、御小手と一聲虚を打てり、竹添君躍氣となれども組まんに由なく、如何はせんと躊躇ふ處を、又もね突は見事大久保君に入れられて竹添君は全敗に歸せり、蓋劍客の上乗は、氣と力と技とを兼備するにあり、かの硫黄硝石木炭は之を適宜に合すれば、其勢天地を震撼するに足るといへども、其中或は缺け、或は足らざれば、即ち一の炮藥にだも如かざらん、劍道も亦た然り、氣力餘りあるも技巧ならざれば眞の用辯爲し難し、竹添君たるもの幸に余が言を咎めずんば、何ぞ技能に熟達して、薩摩隼人の本色を層一層に輝さるや。第十二回より第十七回に至る迄はズル／＼と抄取り、別に記すべきこともなし、只淺見君が笠君を胴小手にて聯勝え、生駒君が三人切の淺見君を小手、面にて往生せしめし際には、搏手喝采大に起りき。第十八回川原田君と關君の勝負中々見えす、互に切結んでは引分れ引分れては切結ぶこと數度、遂に川原田君の勝。第

十九回川原田君と竹崎君、これ最も好敵手、川原田君呼吸を計りて輕々手を下されば、竹崎君も急に打て急に退く、双方時には輕きこと飛燕の如く、時には重きこと盤石の如し、實刀を用ふるかと思へば虛刀を使ひ、小手を狙ふかと思へば面を試む、兩々殆んど互角の勢なりしが、川原田君終に胴一つを輪して敗となれり。第廿回、出でたり出でたり當日の花、五人切の名將、野口君は出でたり、身軀頗る輕捷にして大刀筋甚だ法に協ひ、右手に流し左手に拂ひ、合すれば離れ離るれば合ふ、觀者皆喜色あり、面胴孰れも見事に勝てり。第廿一回國武君のれ面克く入れり、野口君、先づ御禮とて小手を差上げ、間もなく胴を進らせたり、これも國武君が懸り過ぎたればなり。第廿二回川崎君出で向ひ、小手一つは切付たれど、淺手の墓なさ、敵の勢は益熾んに、咄嗟の間に胴と面とを復されたり。第廿三回家入君の太刀筋いつも乍ら華手なり、体勢極めて宜しけれど、何處となく袋竹刀の癖除かざるを覺ゆ、君が專賣特許の掛聲と洋銀縁の眼鏡とは、殊に人の注意を惹けり、續け様に打たれたりどて嘆く

こと勿れ、初秋天高く月清き時會稽の耻は雪がらるればあり。第廿四回野口君破竹の勢に皆人呀呵と拳を握りて讃嘆せる折之も、白軍の方よりは植田君悠然として來り挑む、野口君が數多の勝負に疲れたるを幸ひ、突くぞ打つぞと刀いつかせたる甲斐もなく、又々植田君敗北。第廿五回野口君の大氣焔に白軍は散々に打惱まされ、餘す所唯大將岩井君一人のみ、則ち師範の指揮に従ひ、石崎岩佐大倉の三氏は紅軍を去りて白軍に加はる、されば今度は石崎君と野口君の勝負なり、双方一齊に立上るや、忽地雲蒸し霧涌き、白雨盆を傾け霹靂般々天に轟く、須臾にして雨晴れ雲歛り、涼風颯々道場を一掃すれば、莞爾として獨石崎君の残れるを見る。第廿六回紅軍の勝木君、彼何程の事あらんと武者振出るを、石崎君少しも騒がず、居付懸口お胴お面と續け打に勝、偕勝木君に物申さん、君の態度進退は能く柳川なる大石家の流に似て、見ばえなきに非ざれども、打つ毎に當るも當らざるも、刀を横に振翳して長叫するは如何あらん、霜刀閃電危機千萬の際にも、猶能く此假聲を得作るや否や、論

よりは死地に入る身と覺悟せよお面小手とか叫ぶ違なし」と或人も讀めるが、兎角巧美を板間裡に銜ぶるは素手の目には余り響くは見えぬなり。第廿七回佐伯君と石崎君、石崎君は長大にして佐伯君は短小なり、佐伯君屢「キタナリ」の切聲を出して、秘術を盡すと雖も、石崎君は傲然蔑視するものゝ如く、竹刀をこちること再三、人或は武夫淳厚の風を缺くと稱せり、佐伯君の胴は深く入りて、石崎君の面より其功を奏せしこと確かなりしも、石崎君小手亦占めて勝。第廿八回池田君と石崎君、其体格略ば匹敵したれば、面白き勝負もかなと待設けたるに、石崎君の案外に早く敗れたるは、疲れたる故か、抑々亦他に故ありしか。第廿九回去る一月の招魂祭に銀盃を抱きて歸れる岩佐君も、今日は何故か武運の拙なさ、南無八幡大明神の御加護もなかりしならん、ハツと云ふ間に面と小手には刀痕あらはなり。第卅回大倉君は面一つ、池田君は面と胴とを取りて池田君の勝、連戦連勝の得意思ふべし。第卅一回現はれたるは白軍の大將岩井君、例の如く手慣れの竹刀を上段にうざし、寄らば撃たんと

構ひたり、池田君もさるもの、ひるまず屈せず切り結ぶ互の手練は恰も南山の猛虎北海の蒼龍と勇を奮つて闘ふが如く、一上二下虚々實々、暫し雌雄も分からざりしが、終に池田君の太刀風競はず、岩井君は首尾能く龍口の玉を得られたり。第卅二回卅三回、失敬乍ら少し経庭ありしやに見受けたり、飯田君は半點焦燥つ氣色なく、注意充分の譽れありしも、如何せん岩井君の老練敏捷には敵し難く、突、突二本まで占められて倒れたり。齋藤君之を觀て一聲高く雲を破り、獅子奮進虎亂入の勢を以て飛鳥の如く働さしも、神出鬼没滿堂を睥睨せる岩井君には、又しも膽魂迷亂し、小手、小手と呼ばせて、終に全勝を白に譲れり。

三本勝負既に終つて一本勝負の切取となる。石崎、飯田君に初まり、大倉、岩井君に終れり。此勝負には前と反對に紅早く盡きて白より代り赴けり。紅白全く解けて團樂快話、設けの茶菓を喫するや、劇囃たる湯喇叭樹梢に響きて、陰然健兒の浴を促すものゝ如し。此日昇級の榮を得たる諸氏の姓名を掲ぐれば

飯田御世吉郎 大倉憲英 植田精作  
松原常興 川崎齊一郎 岩佐尙一

### 右二級に昇進

石崎芳吉 宮國千代吉 野口常治  
竹崎音吉 田崎藤一 川原田友彦  
島田嘉一郎

### 右三級に昇進

荒木勝三郎 大久保有明 中村甚作  
右四級に昇進

## ○演說會概況

過五月廿九日豫定の如く、本學年最終の演說會を瑞邦館に開く。連日の雨猶未だ歇まず、其他百忙の中にありて、割合に多く諸君の來集せられたるを喜ぶ、午后二時佐久間部長先づ開會の由を述べられ、直に第一席の辯士江口俊博君聳然として演壇に起つ、先づ昨年以来氏が總務委員に推されて、十分の斡旋を盡し得ざりし由を述べ次に委員事務の至難なるは敢て局外者の測り知る所にあらずとなし、爾來双方相輔翼して龍南會の目的を達せよと説く。氏が永年本會の爲に盡されたる功績に至りては今更此處に言ふを

須ゐず、今其去らんとするに臨み此言をのこさる、吾人一同亦熟察すべきし。是より氏が演題たる「我日本」の本論に入る。その磊落の辯を以て徐ろに説て曰く、熟々現時の日本を觀察すれば昨年戰勝の折に當りて我國民の豪氣は實に宇内を吞吐するの慨ありき而かもまだ幾何ならずして、今日の有様となりしはいかに。余の觀察を以てすれば、其戰勝に際してや、我則英國と思へり戰後に於ては、我則露西亞と思ひぬ而して三國干涉の後はその擬するものを失ひぬ、只我則日本なりき是に於て國民は一時茫然たるに至れるのみ。決して日本の元氣が挫折せしにあらず。と快活なる斷案を下し、之より吾人の希望の大なることに論及し、此天祐ある戰勝をして皇天が十分の功果なからしめたるは。天の囑望し給ふもの今日の政事家にあらずして。即今日の青年にあるものゝ如しと述べ論は愈佳境に入る。是より彼稻垣滿次郎氏の東洋破裂の三時期を述べ三者皆吾人が滿腔の經綸を吐くの望みありとなえ、以是觀之吾人は好時期に生れたりといひ、爾來我國は愈々外交の術を練る可きを論じ、吾人



も亦大に覺悟する所あらざる可からざるを説きて。氏か所謂我日本なる演説は此處に局を結びぬ。第二席湯淺孫三郎君代りて現る。知行合一と知行并進とにてふ題目の下に氏が獨特なる明快の辯は揮はれぬ、先づ曰く學術上の理論を説くは老儒と雖難しとする所、況んや淺學にして經驗なき余輩の如きを以て此題目に就て十分説盡すは頗ぶる難事なれども、只平生考ふる所を以て聊か演說會の責を果すのみ。今は諸君が王學の大体に通せるものとして教を乞ひ、他日好機を得ば雜誌上に於て餘姚宗義若くは姚學概論と題して校友諸君の教を受くることあるべし云々是より直に本題に入りて飛瀑直下の勢を以て滔々止まる所を知らずその大要を述ぶれば曰く王陽明の文録には、或は知行合一と曰ひ、或は知行并進と曰ひ、或は知行の合一并進と曰ふこと見へたり。而るに世間の王學を論する者は、是等の語に注意せず、概漠然として同一視せるが如し。是れ予の甚だ怪む所なり。予は王陽明の知行論を批評せんとらば、之を泰西諸學者の説に比較するに先ちて、十分に陽明の説く所を驗察

せざる可からずと信するなり。さて陽明の知行合一説の大体を言へば、先づ二の假定説を知らざるべからず。即ち他ならず、身心意知物は五件にわらずして一件なりと云ふこと、完々全々無善無惡の至善即良知は本來吾に固有せりと云ふこと、なり。而るに陽明によれば。身の主宰は便ち是れ心、心の發する所は便ち是れ意、意の本體は便ち是れ知、意の在る所は便ち是れ物なり。故に本體上より言へば、知と行とは全く合一なり、是れが即ち知行合一なり。而るに小人は、私慾の爲めに、心の本體を失ふが故に、知と行とが分離して、合一なること能はず。是に於て學問工夫を用ひて、之を合一の本體に引き復すなり。其工夫は大學の誠意に他ならず、誠意の工夫は致知格物これなり。是が陽明と朱子と、大に其見解を異にする所なるが、一言に陽明の格致を説けば、念々意々に吾良知を致すは即ち致知なり、致知するに由て意々念々が天理の正を得るは即ち格物なり。故に物を格さずして知を致すことを得ず、知を致さずして物を格すことを得ず。換言すれば、知致て物格く、物格しきは知致るなり、内に

よりて外を修め、外によりて内を証す、内外一枚、合せて之を言へば誠意是のみ。かく知を致すは物を格す所以、物を格すは知を致す所以なるが故に、知と行とが並び進むなり、是が即ち知行并進なり。知行并進の工夫を積んで已まざれば、竟には知行合一の本體に復ることを得るなり。ザット陽明の知行論の大要ハ右の如し。さて此の如く説くときは、知行合一の知は、今日普通に謂ふ所の智識にあらざることは明なり、これは實に陽明の言に徴しても知らるべし。然らばこの知とは何ぞやと問はば、予ハ孟子の良知良能の知なりと答ふべし、この事は羅近溪、劉戡山、毛奇齡等の諸學者が辯明せるのみならず、陽明自らも知行本体即是良知良能と曰へるにて明白なり。この知を他にえては、知行合一と曰ふとは、斷じて出來ぬなり。而るに此に奇怪なるは、四言教なり。四言教にては、良知を説て、知善知惡是良知とあり。若し善を知り惡を知るか良知ならば、良知の作用は、純粹なる判斷に屬するが故に、孟子の良知と字面は同くして意味は大に異れり。故に知と行との間に隔離ありて、知行合一

とは曰へぬことなり。然れども、知行并進といふことは可也、何となれば、前に述べたる所の工夫は此處にも亦た適すればなり。さて以上予の見所が、謬らずば、知行合一と知行并進とは、同一視すべからざるのみならず、陽明自らにも其知行論には思想上の誤謬ありと思はるゝなり。然れども、こは陽明か一生に説きし所に由りて、其思想を議することなれば、若し陽明の教化の主義が、彼自身が云へる如く、學者の人を教めるは醫の病を治するが如し、一定の方を拘り取らざるにあらば、之を以て陽明を議するは少しくれ門違とも謂ふを得べし。何はともあれ、予の斷定は、四言教の知と知行合一の知とは同一の知にあらす、若し之を同一の知とせば、四言教の理論と知行合一の理論とは、兩立することを得ざるべしと云ふにあり。然らば孰れが陽明晩年の定論なるか、予は尙ほ研究中にして茲に斷言は出來ねど、今日の所にては、四言教の理論が晩年の定説にてはあらざるやと疑ふものなり云々。」此日の演説は態度辯舌概して批難すべきものなし。江口君は態度尤も宜しく辯舌快活、唯之を政

治家的演説とすれば割合に energy 少く湯淺君のは學者的演説として寧ろ辯舌に energy の多きに過ぐ。其明快、論旨徹底するに至りては他の及ばざる所演壇は湯淺君を送るや割るゝが如き喝采の中に佐久間教授は早や壇上に立たる。題は『英語の歴史』、談せらるゝものは佐久間先生なり。衆皆膝の進むを覺えざりしも亦怪しむに足らざる也。其略に曰く『英語は廣義に言ふ時は彼の歴史上に見ゆる他國民より襲はれし以來今日迄變化を來れるものゝ總てを指す、之を分て三とす。一 Old English 二 Middle English 三 Modern English 是也。此等の最古なるものと最近なるものとを比較し來れば殆別語の如きも、皆同じ系圖を有するものと知る可し。古語の今日殘れるものは殆ど其四分の一に過ぎずして近代の獨語に類似す、今その年紀を以さんに二〇〇以前を Old E. とす、一〇〇より二〇〇頃迄を Middle E. とし、一二〇〇より一三〇〇迄を Early E. とし、一三〇〇より一四〇〇を Later M. E. とし、一四〇〇より一五〇〇迄を Early Modern E. とし、而きて一六一一以後を今代の英語とす、云々』是れよ先

生は進て古代より今代に至る英語變遷の主要を演述せられたり。先生の斯道に於る由來并びなしと稱す。此論の如き吾人珍寶とせざるべからず、其要は摘記して委員の手にありと雖、紙數に限あり、且つ倉卒の際、筆記の疎鹵或は先生の玉説を傷けんことを恐れ、茲に之を略す。異日先生の訂正を請ふて本誌に掲げんとす。

佐久間先生拍手の中に降壇せらるゝや委員は閉會の由を述べ茶菓を頒ち皆膝を交へて快談し全く散會せしは午後四時を過ぎたり。

### ○謹吊中沼教授嚴君之逝去

噫痛恨事痛恨事、昊天何ぞ余輩をして不吉の筆を執らしむることの頻繁なるや。三月に於て園助教授母堂の逝去を悲しみ、四月に於て森寺綏來君の永眠を嘆き、五月に於て故稻葉中嶋二氏の靈魂を吊ひ、而して今又六月を迎えて、中沼教授の考父を追悼するの恨事に接せり。有爲轉變の習、生者必滅の掟、始めて驚くべきに非ずといへども、昊天無情、斯の如く我教師弟に禍するに至つては、悲慟痛哭何ぞ堪へん、正に愁然長太息

して千返萬度は耶非耶を絶叫せざるべからず。  
時下杜鵑血に鳴いて臙月暗く、橘香枕邊を擁し  
て、轉た人をして故人の英姿を想はしむ。噫痛恨  
事痛恨事、妙覺の如來今何處にかある、大智舍利  
弗亦頼むに足らざる乎。恭しく吊意を表す。

### ○二三通學生諸君に質す

諸君は緊急の電音を、忽諸に附するの嫌ひ無き  
乎。久潤の來訪者を、無爲に歸すの嫌ひなきか。  
諸君の父兄親昵は、固より諸君の宿所に通せん。  
然れども何時何人が、直接學寮に向つて、發電來  
訪するを知らんや。然るに此日此時、諸君の宿所  
學寮に明らかならずんば、誰か又此報を諸君に  
傳へん。況んや校用會用は、時として諸君の宿所  
を豫め知るの必要を証するをや。是を以て嚮き  
に當局者は、通學生の自己の宿所を、速に屈出べ  
き旨揭示せり。其後若干もなくして、監督教授は  
更に其旨を促せり。多數の通學生は既に相當の  
書式を終へたりと雖、獨り君等二三生は荏苒彌  
久、今猶は屈出を爲さざるやに聞けり。余輩は信  
ず、諸君は決して當局者の命を蔑にする者に非

ざることを、各自の宿所を告ぐも毫も心に疚ま  
しき處あることなきを。果して然らば何を苦ん  
でか遷延以て今日に至るや。余輩は嘗に當局者  
に對して憂ふるのみならず、特に諸君の爲めに  
悲しむものなり。怪疑に堪へざるまゝ敢て質す。

### ○近事一束

●●●●●  
校長歸校 中川學校長には過般高等學校長會議  
へ列席の爲め上京中の處去月二日歸校せられた  
り。

●●●●●  
故北白川宮殿下 紀念物設置費の一部として過  
般來我校に於て募集し得たる金額は拾七圓餘に  
達したりと云ふ、涓滴の少額いさゝか殿下の偉  
烈を欽仰するの微誠のみ。

●●●●●  
黒本教授 助教授黒本植氏は今般教授に任せら  
れ高等官八等に叙せられたり。

●●●●●  
學年試業 黃梅時節さなきだに神氣懊鬱たるに  
學生の一大厄期は此の時を以て來れり三年級は  
十七日より其他は二十二日より始まると云ふ此  
關透過了せば八旬の樂天地は隨處に諸君を迎へ  
ん努めんかな。

制服着用　頃日學校揭示して曰く制服を着用するにあらすんば學年試業を受けるを許さずと周匠なる哉用意是にあらすんば以て我校の美をなすに足らず。

朽骨腐肉　一言知已の眞情に感ずれば單身往て  
仇を刺す。敵も亦好漢なるかな。朽骨腐肉血なく  
涙なく打するだも痛痒を感ぜざるもの吾爾を如  
何せん。

紀念書物 故值賀理學士の爲めに舊友知人相謀て金を醸し圖書を大學の文庫に納めて以て同氏の紀念をなさんとするの舉あり篤志の士應分の義捐をなさんと欲するものは之を鶴田講師若佐正雄の兩氏に致せ。

『陽明學』 是れ東都牛込の鉄華書院より出づる所の一雜誌なり自ら云ふ第二の藤樹菴山中齋象山松蔭東行龍雄たらんと欲するものは就て學べど口頭紙面の學人物を陶冶するに足らざるや久し然れども亦た入門の一方便たるを失はず願くば萬難を排して斯學の爲めに勇進せよ每號寄贈を辱ふするの約あり故に一言を費す詳細を知らんと欲せば請ふ廣告案を見よ。

次學年の習學寮 試に我校の一覽表を執て之を閱せよ、雜誌部の附屬たる硯友會の規則を載するに一頁餘を費すも吾習學寮の規定に至りては纔かに數行に過ぎず、是れ諸人の怪みし所、聞く所によれば來學年に於ては全寮生の誓盟によりて各自の遵守すべき一大綱領を議定し自ら設けたる規約は自ら破らざるの大責任制度を確立するなど非常なる根本的改行はるゝと云、果して然らば吾習學寮が偉大なる校風の中心となりて龍山の麓別に一天地を開くに至るは近きにあるべし、姑く聞くかまゝを記して次學年を待つ

同朋雜誌

尙志會雜誌第拾五號

同志會雜誌第拾五號 論說には教授山本悌二郎氏の「我國銀行制度の發達を評きて勸業銀行に及ぶ」と題するものの一篇を掲ぐ、冒頭先づ生産の要素は天然物、勞力及資本の三者なることを述べ、文化發達し經濟益旺盛に赴くに及て資本は三者中尤樞要の地を占むるに至ると説き、夫より一國に於て資本供給の手段を論ぜ、銀行の事に及び、銀行の性質を述べ而して後我國の銀行に移り滔々論ぜらる、此道にさりて有益なるべし。猶未完なり。論說は此一篇にして物足らぬ心地す。維